

国

月)

巻頭エッセー

「大学を変える」ということの意味

東京外国語大学長 中嶋 嶺雄

来る8月末日で2期6年間の学長職を退任することになった私として、若干の感想を述べさせていただくのは、ここに記すことが格別意味を持っているからではなく、なんらかのご参考になるやもしれないという思いからであります。

1995（平成7）年9月に学長となった私は、同年秋（11月）の国立大学協会総会（第97回）における新任者自己紹介の挨拶で、「21世紀に向けてのこれからの時代を主導するのは『公』ではなく『民』であり、そこでは市場原理と民意に基づく政治が大きな意味をもつのではないか。国立大学もこうした歴史の潮流に背を向けられないと思う」といった趣旨の発言をした記憶があります。それは特に国立大学の設置形態の在り方を意識して発言したわけではなく、中国や旧ソ連・東欧諸国など社会主義体制の問題点を専門の国際関係論の立場から述べることによって自己紹介を兼ねさせていただいたつもりだったのですが、早速、先輩の学長からその場でご批判を受けました。「大学問題に市場原理などということをもっては困る」といったご趣旨で、確か高知大学の立川 涼・学長からであったと思います。

私にとって2度目の1996（平成8）年6月の総会では、文部省幹部から恒例の所管事項説明があり、そのなかで国立大学の施設についての文教施設部長からの説明がありました。それにたいして、このような場で一大学のことを質問するのはどうかと若干気が引けたのですが、閣議決定からもう10年以上も経過している

東京外国語大学の移転はどうなっているのかと質問したところ、午後の文部省主催による国立大学長会議の席上、当時の雨宮 忠・高等教育局長が「東京外国語大学の移転は実行いたします」と明言してくださいました。この答弁を契機に事態は急速に動き出し、同年8月には文部省施設計画調整会議で府中新キャンパスの基本設計が承認され、翌々1997（平成9）年9月の起工式へとつながっていきました。前年の補正予算では東京大学の柏新キャンパスが逆転して決まっただけに、一大学のこととはいえ、公の場で思い切って発言してよかったという思いが、雨宮局長への感謝の念とともに思い起こされます。

ところで、国立大学の在り方についての議論は、その後急速に大きな課題になり、去る6月中旬の国立大学協会総会（第108回）に深刻な衝撃を与えたいわゆる「遠山プラン」となって今日を迎えています。このように議論が高揚する以前に国立大学協会が独自の研究・調査を進めていたことについても、ここに記しておくべきでしょう。それは阿部謹也・一橋大学長を委員長として1997（平成9）年3月に設置された「国立大学の在り方と使命に関する特別委員会」のことです。当時はまだ独立行政法人という言葉も一般的ではなかった頃で、この特別委員会ではイギリスのエージェンシーのことなどをいろいろと勉強させていただきました。委員のなかには後にソニーの社外重役を兼業する問題で国立大学を去られることとなった一橋大学の中谷 巖教授もおられ、国立大学にいか「民」の要素を導入すべきかについて、私と意見が重なるところが多かったように思います。本当は、この特別委員会はその後も存続してほしかったのですが、やがて同年秋から独立行政法人問題が本格化するとともに蓮實重彦・東京大学長が国大協会長になり、阿部博之・東北大学長に加えて私が副会長になって以降の1999（平

成11)年3月には解散されました。そのような方針が理事会で討議されたとき、ここは会長の意向を尊重すべきものと思って、私はあえて意見を申し上げませんでした。

私が国立大学協会の理事に選ばれ、理事会に出て初めて知ったのは、国大協には会長、副会長の選出に際して「旧帝大」という言葉が慣例紹介のなかに残っていたことでもあります。これにはいささか驚き、会長、副会長は理事会での任意の選挙で選出すべきことを提案させていただきましたが、結果としては、はからずも私が3年近く蓮實会長と京都大学長の長尾 真会長のもとで副会長を務めることとなりました。しかし、国大協を構成する99国立大学のうち半数近くは単科大学ですので、その点ではいささか意味があったかもしれません。

文学者として言葉のレトリックに富んだ蓮實会長は、有馬朗人・元文部大臣や工藤智規・高等教育局長にたいしても時として厳しく指弾されることがありましたので、私は副会長としていささか困ったこともありました。なんといっても忘れ難いのは、独立行政法人化について、国大協は通則法に原則反対という決議をしていながら、蓮實会長の強い意向で名古屋大学の松尾 稔学長に独法化問題での対応策の検討を依頼していた件であります。いわゆる「松尾レポート」のことですが、この点を蓮實会長自身は、こう述べています。「会長の個人の責任でそれを秘密裏に用意するしかあるまいと判断した私は……名古屋大学の松尾 稔総長の意見をうかがったのです。……隠密の実働部隊の責任者という危うい条件を快諾された松尾総長には、いまでも深い感謝の念をいただいております。その献身的な努力がなければ、国大協は今頃空中分解していたかもしれないからです」(「漱石も嘆いていた百年前の『学力低下』」、『現代』2001年6月号)。この「松尾レポ

ート」については、蓮實会長自身の言葉にもありますように、いわゆる「旧帝大」の学長ら以外、国大協副会長の私にも全く知らされていませんでした。1999年6月の国大協総会（第104回）で「松尾レポート」の存在が明かされたのですが、私自身は見えていませんでしたので、いささか言いにくかったのですが総会終了時に議長席でお隣りの蓮實会長にお願いして、会長ご自身の鞆のなかに残っていてコピーを頂戴した次第です。しかし、こんなことがあっていいものかと釈然としない気持ちの私は、たまたまその年の4月にボンで開かれた日独学長会議にご一緒して気心が知れていた内藤喜之・東京工業大学長と、石 弘光・一橋大学長にその場で声をかけ、学士会館向いの如水会館のレストランへ行って話し合ったのでした。このときにもいわゆる「旧帝大」への不満が当然に生まれましたが、その際に東京医科歯科大学や東京芸術大学も誘って5大学で連携しようという方向に話が展開し、今日の「4大学連合」に至ったのですから、今となっては蓮實会長に大いに感謝すべきでありましょう。

しかし、この「4大学連合」についても、東京外国語大学の場合は、その経緯がトップ・ダウンだというので、学部自治の壁に阻まれて、機関決定までに難航を重ねました。学部教授会で否決されたら私は責任をとって即刻学長を辞任するつもりであり、その点は回避されましたものの、6年間の私の学長職において、懸案の学部改革は十分に果たせませんでした。1873（明治6）年に現在は国立情報学研究所がある一ツ橋通町一番地（当時）に東京外国語学校が開設されたとき、これからの時代を担うには外国語が必須だとして、その英語科には岡倉天心、新渡戸稲造、内村鑑三、嘉納治五郎ら近代日本を担った錚々たる青年が入学してきました。現に彼らはそこでお雇い外国人から英語によって英語を学び、やがて天

心の『茶の本』や新渡戸の『武士道』に見られるように、実に立派な英語で世界に向けて発信して行ったのです。それから130年近くを経た今日の国際化・グローバル化の時代の東京外国語大学に、当時の栄光の一端でも復活できたらとの思いで大学改革に尽力したつもりでしたが、多くの教官にそうした関心や意識を共有してもらうことは不可能だったように思われます。IT革命などの情報化の進展や自由に海外の対象国や対象地域へ行けたり留学できる時代にあって、そもそも外国語教育専門の大学が果たして有効性をもつのか、もしかするとその歴史的使命は終わっているのではないか、といった自己認識や緊張感さえ薄いのが一般だといえましょう。

私自身、国大協第5常置委員会委員長としての任を負い、また、立ち上げに際しては国大協から全面的なご支援ご協力を頂いたUMAP（アジア太平洋大学交流機構）国際事務局の事務総長として世界各国・各地域の大学の学長とお会いするたびに痛感するのですが、日本の国立大学においては、やはり現行の大学運営の仕組みを抜本的に変えるのでなければ、「大学を変える」意味も有り得ないというのが、6年間の私の学長職の結論でありそうです。

長い間、本当にありがとうございました。

(2001・8・13 信州・松本・神田の望岳山荘にて)